



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク・大学間交流協議会
Description	第2部資料編 第1章インタビューの記録6 日時:2004年8月5日13:00~15:00, 場所:東京農業大学生物産業学部, 話し手:田中俊次, 聞き手:姉崎・光本・石山・伊藤・上田・佐藤克・滝ヶ平
Citation	高等継続教育研究, 4, 125-141
Issue Date	2005-09-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35135
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p125-141.pdf



6. オホーツク・大学間交流協議会

日 時 2004 年 8 月 5 日 13:00~15:00

場 所 東京農業大学生物産業学部

話し手 田中 俊次 氏（東京農業大学生物産業学部産業経営学科長・教授）

聞き手 姉崎・光本・石山・伊藤・上田・佐藤克・滝ヶ平

協議会の発足

田中 我々はたいしたことをやっているというつもりはないのですが、16 年前にこの生物産業学部がこちらに開設を致しまして、私もそれに合わせて開設時こちらに来ました。それまでは東京で研究所にいたのですけれども、こちらへ移ってきて一番初めに、網走というところが初めてだったものですから、どんなところだろうと思って来たら、何かものすごい寂しい。他の大学があるという話は聞いていたのですけれども、どういった大学があるのか全く分らなかった。調べてみましたが、その当時はすでにできあがっている道都大学、それから北見工業大学と北海学園北見大学とその三つがあったのです。それぞれ学部が全部違うわけです。それで、怖いもの知らずというのですかね（笑）。

同時に、東京にいた頃は、けっこう研究交流というのが多かったのです。大学が多いですし。それでいろんな大学の先生方と研究会が開かれていたのですけれども、その点が一番心配だったものですから、最初はその点です。何とか研究交流ができる環境があるのかどうか、なければつくらなければいけないと、そこから始まったのです。だから、申し訳ないのですが、地域に貢献しようというのはそんなに大きな意識はなかったですね。

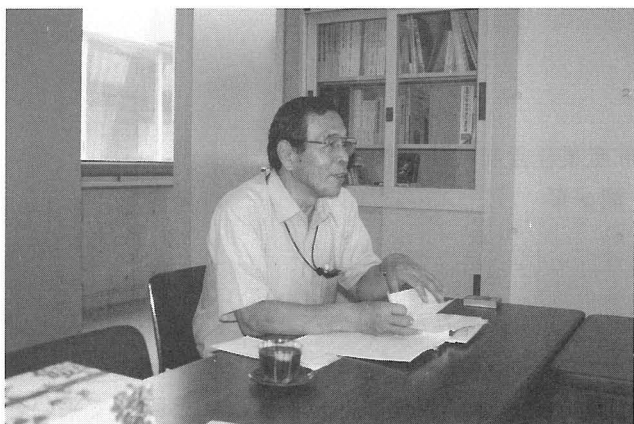
その当時は、道都大学は美術学部がこちらにありまして、いまは社会福祉学部だけですが、それから工業大学、美術、福祉、工学ですね、それから北海学園北見大学の商学、そして我々の生物、バイオインダストリー、いわゆる生物産業学部です。そうするとこれファンクション、機能として一つに合わせると総合大学ができるのではないかとということで、それはあくまでもアイデアの段階なのですが、黒瀧さんという人と、それからもう一人、いまは立教大学の教授となっている小松善雄という教授がいたのですが、じゃあこれ何とか連携できないかなということで、これは酷いことで、飲みながらやっていたのですが、気楽なつもりで、「ああいいね、それ、やらなきゃだめ

だよ」。他人事みたいにいっていたら、小松さんという人は乱暴な人で、「お前、いいっていったよな、おまえちょっと回って来い」。「ちょっと回って来いといってもね、場所が分からない」といったら、「調べりゃ分かるだろう」とかいって、「とにかく行って来い」と。「それで、誰に会えばいいのだ」と、そして、「そんなの、調べりゃ分かるだろう。とにかくお前行って来い」と。結局、あちこち電話しまして、それで会っていただくことになりました。

協議会の理念——ボーダレスと地域課題の共有

田中 とにかく車がなかったものですから、バスで移動するわけですね。1 校回るのに半日かかる。道都へ行くのに、行って帰ってきたら日が暮れて、これはえらいことになった、やめときゃよかった。それで行ったら、道都大のその先生が学部長でしたが、「いや、いいことですね、それは」と。「なかなかいいことだ、それで話はいいことだけれど、まあ無理ですね」とはっきり。「あなたたちは来たばかりだから分からないだろうけれど、ここはそういった文化とか、学術とかということに冷たい冷淡なところ」というような話だったものですから、やり方によっては何とかなるんじゃないかといったら、「学内で検討しましょう」と。それで、一軒一軒回っていたんですけど、北見工大が国立大学なんですけれども、僕も工大、国立というのがよく分らなかったものですから、形式的な決まりがあるとは思わなかったものですから、「連携しましょうよ」といったら、その当時の学生部長さんが、「そんなのうちでは機関決定をしなければいけない大変なことなんだ」と、「簡単に来ないでくれ」と、否定的なのです。とにかくこっちできっちりした趣旨を立てなきゃいかん。そこから始めて、この地域が抱えている諸問題というのがいっぱいあるだろうということで調べまして、第 1 回のセミナーの報告書の一番後の方にありますが、アンケート調査をやったのです。

この地域はどういった問題を抱えているのか、課題



田中氏

は何なのか、それからその課題を解決するためにどういったことが考えられるのか、大学にはどういったことを希望するのか、要望するか、また、大学に対する不満というのはないのか、いろんな項目を設けまして、あらかじめのことが分かって、それは報告書を読んでいただければ分かりますが、要は地域が抱えている問題は産業ごとにいっぱいあるのですよね、我々の関係する農作物の問題とか、流通の問題ですとか、それから環境問題ですね、海、川の汚染とか、森林の破壊とか、そういったような問題がさまざま出てきて、地域が抱える諸課題を地域に存立する大学が面と向き合って解決していくということが必要だろうし、それをやらなければ、いまから15年くらい前ですけど、地域に存立する大学の意義、アイデンティティはないんじゃないか、というのが一つありました。

それともう一つは、意外と地域の人たちは大学に求めている希望とかそういったものがいっぱいありましたけれど、その中でももう少し先生方といっしょに勉強したいという意識もあって、それに応えるようなこともやっていこうじゃないかということで、アンケートの結果と、それをまとめた我々の見解、趣旨を書きまして、もう一回、回り直したのです。そうしたら、それはよく分かる、我々もそれはもうすでによく分かっている、ただ手立てがなかった、連携することはいいです、ということで、でもどの大学も機関決定で、大学でやるという、大学という機関が決定して公式に連携をとる。かなりその方途は探ったのですけれども、結論としては難しそうだなあとということで、とりあえずは有志、各大学のそういったことに関心があり、なおかつかわりたいたいという先生方にぜひ手を上げていただけないだろうかということで、結果としては未だにそれがその有志というかたちで緩い連携で進んできている。

第1回目はうちの大学でやろうじゃないかということで、この網走市民のある方から出たのですけれど、大学は敷居が高いのだと、どうも大学に入ってくるのもちょっと気後れする。入っていてもどこで何をいえばいいか、どこに行けばいいか分からない。だいたい大学の先生が何をしているのか分からない。そういうことで、敷居や垣根、これが各大学にもいろいろさまざまな事情がある。それから26市町村この管内あるわけですけども、全部回ったわけではありませんが、話を聞いていますと、垣根があり、そのころちょうど国際化という動きが顕著でして、その後“ボーダレス”、“グローバリズム”というようなかたちになってきているわけですが、我々も敷居垣根を取り払おうということで“ボーダレス”という概念を我々のキー概念にしようということで、全部の報告書に“ボーダレス”ということを書いています。「ボーダレスオホーツク21」——そのときは20世紀でしたが、21世紀ボーダレスにしたいというキー概念で、それで第1回目をここでやったのです。

だいたいこういう学術セミナーをやっても、一生懸命回ってもせいぜい30から40人くらいしか集まらない、100なんて無理だ、そうかなとか思いながら農協とか漁協とか一生懸命回ったりしたり、それと同時に道庁に、ここは網走支庁ですけども、に行きまして趣旨を話をしまして、地域開発振興助成金という制度があつて、こういったものに使えないだろうかという、それは大いに結構だということで、意外とすんなりいきました。ただ限度があつて、その当時は50万くらいしかつかなかった。50万じゃどうしようもないなあ、でもお金がないから、といていたたら、その当時の支長が、特例事項で150万くらいはつけられるのじゃないか、ということで配慮してくださいました。それで足りるとは思いませんでしたが、一応の資金、手当てはつきました。それで企画を組んでいきました。

それで地域の課題を解決するというのが我々のテーマなのだよ、地域連携を深めていこうじゃないか、ということで、皆さんその趣旨に賛同してくださいまして、農協、漁協、各市町村、関係機関である商工会議所、青年会議所、あらゆるところを回りまして、賛同を得まして、それぞれ資金も援助、寄付というようなかたちで出してくださいまして、400万くらい集まりまして、これならできると。それで企画を組みまして、やっている最中で、まだ正式な連携を組むという承認が得られる前に、新聞が先に分かたらしく、北

見工大の先生が、「正式決定もしていないのに新聞にでかでかと載って、我々としては非常に迷惑である」と、それで、非常に謀略的なやり方だと、あの組織は“謀略機関”だという、何を謀略するかよく分からないですけども（笑）。北見工大の中に非常に熱心な先生がいらっしやいまして、その先生がこの3市、トライアングルゾーンを連携をしよう、いわゆる問題、課題の共有をしていきたいと。

それと同時に、その先生はもっと大きな夢を持っていらっしやって、ここは“環オホーツク海圏”である。そのとき初めて“環オホーツク海圏”という概念が出てきました。いままでは、環日本海とか、環渤海とか、いろいろとそういう概念はあったんですけども、“環オホーツク海圏”ということで、ロシア、北海道、それから中国という大きなトライアングルを射程に入れて考えていこう、すぐはできないけれど、ということで、ちょっと理念めいたものがあって、それで、壮大な計画ができたのです。

けれども、足元を見たらさっきいったように“謀略機関”になっているような状況もありまして、だんだん少しずつ説明していきまして理解は得られてきたのですが、第1回目をぎりぎり、要するに予算執行というのはだいたい3月いっぱいまで全部執行しなければなりません、そういったすったもんだがあってなかなか開けなくて、結局ぎりぎり2月の末になって開催ができました。市民の人たちに来てもらいたいということで、でっかいポスターつくって案内したのですが、農大は山の上なので、東京農大でボートレースがあるらしいけれど、ボートレースはどこでやるのだろうかという、“ボードレス”を見てボートレース、山の上でボートレースなんてできるのか？という問い合わせがあったくらい、そのくらい理解、認識、認知度が低かったということなのですね。やっとそれでも開けまして、最初280人集まりまして、これは異常だということで、市長も喜んでいただいて、とりあえず十何年かやってきたという経緯があります。

リカレント、生涯学習まちづくり

田中 途中から紆余曲折がありまして、最初の何年か順調だったのですが、地域振興に関する資金というのが、道の場合は3年間と限られているので、それで今度は名称を変えたり、趣旨を変えたりしながら、やっていることは同じなのですけども、結局、十何年間もらい続けている現実には、いよいよ厳しくなって、

日本経済がかなり厳しくなって、これは日本全国同じなのですが、地方自治体も3、4年前からかなり厳しくなってきました。大学間交流協議会というセミナーの名称では支援はできないと、非常に僕は不可思議に思いましたけれど、一方で地域連携を進めようといひながら、そういったことはできないと。道を責めるつもりはまったくないですが、責めるどころか素直に不思議で何でそうになってしまうのだろうという疑問の方が強いのですが、そういうのだったらしょうがないから変えまして、生涯学習、リカレントをやるのだという、地域の課題を考えながら、ともに考え方や方向性を見定める勉強会なのだと、おこがましいけれど地域の人たちとともに勉強して教育をしていこうというのが、この報告書の趣旨、最近のこの3回目ぐらいです。リカレント何とか、そういう文言が多くなっているのです。でも報告書を読んでいただければ、中身は前と同じではないかという感じなのですけどね。苦肉の策なのですけど、ちょっと変えながらやってきたというところがあります。したがって、それを補足するようなかたちで、文科省の「生涯学習まちづくりモデル」とか、こういった支援事業にも応募しまして採択されて、そっちの方の支援金を獲得しながらやってきました。

環オホーツク海圏交流

田中 それから、その間、“環オホーツク海圏”という概念で国際交流をやっているじゃないか、ということで、オホーツク圏の交流の事業もやりました。これには中国、ロシア、モンゴル、それから日本の研究者が集まりまして、これも移動の処置とかそういったものも事務局でやったものですから、かなり大変でした。1992年ですから、いまからもう12年前ですが、その当時は中国も大揺れに揺れている状態でしたし、ロシアはソ連崩壊でほとんどアノミーの状態なのですね、そういう状態の中で交流をすることの難しさを感じました。その後も別の資金を援用しながら交流したのですが、学術交流とか研究交流なんていう名称はそうなのですが、実態は相手方の資金稼ぎみたいなところがありまして、やっぱり金額が違うのですね、20万円の研究費があつて、10万ずつ分担してそれぞれの研究課題でやりましようといつたら、10万円というのはその当時、ロシアで相当なお金になるのですね。ほとんど3分の2くらいどこにいったか分からない、なおかつ、もっともっと研究やりたいから資金の方をと、妙に資金の話ばかりになりました。最

初は我々うかつにも気がつかなかったもので、いやあ大変なのだお金を工面して、途中からこりゃいかんということで、きっちりした一定額をそれから具体的方法というようなことで、これに従ってやってもらいたい、それで中間で報告してもらって、最終的にディスカッションをやるということをやりました。

変な話ですけども、ユジノサハリンスク教育大学の先生方は大変で、ソ連が崩壊してロシアの中でも外れたところでもう見捨てられた状況の中で、本当に研究費、助成が途絶えているわけです。日本語学科の学生さんが2人、男子学生と女子学生なのですが、ものすごく熱心なのです。我々の方も学生交流ということで、学生を組織しているのですが、向こうは2年間くらいで日本語が話せるようになって、こっちの学生は8年くらいやっても話せるようにならない。学生たちにとってはやっぱりカルチャーショックです。こりゃいかん、いい加減な勉強しているのじゃないか、ということで、交流をして、先生方も交流をして、懇親会をやったりして、それで日本のカラオケというのはどういうものだと関心を示すので、カラオケをやっているスナックへ連れて行きまして、そうしたら、そこが記念にとお店のライターをみなさんに配ったら、もっとくれというわけですよ。100円の使い捨てライターをどうするのだろうと思ったら、これ1個で1カ月位の部屋代になるのだとか、免除してもらえるのだということで、山ほど持って帰りました。そのときに、お前たちって何やっているのだと、本当にまじめにやってくれるのかなと不安がありました。そういったことをずっとやってきました。

最近では、“環オホーツク海圏”ということもきっちりやっていかなければいけないということで、去年、一昨年から出しはじめた文科省の科研費で、基盤研究(A)で3000万ということで採択されまして、これから調査研究を始めるということで、その下準備を始めるというところなのですが、これも各大学の大学間交流協議会の先生方がメンバーです。

15周年特別企画

田中 今年の第15回というのは、15周年の記念企画ということで、大学間交流協議会のセミナーを特別企画ということで進めているところですけども、道そのものも道州制云々でかなり本腰入れて北海道経済の建て直しをすることから、どうだろうということで、うちの大学の理事長が実は紋別の出身でして、北海道に当然関心が高いわけですし、高橋道知事と、こうい

った転換期の北海道経済と地域活性化における大学の役割というようなことで対談を午前中やったらどうかと、午後は3市の市長、網走・北見・紋別の市長が集まって、中には網走管内の町村会長、佐呂間町の町長さんがいるものですから、午後はシンポジウムをやろうというような企画をしています。

高橋知事に打診したら、優先順位をつけているらしく、道議会には出るとかあって、我々はどうも最下位らしいのです。まず無理だろうと。それで、この管内の出身の選出議員である武部勤氏という衆議院議員がいて、彼に連絡をして7月24日、出張で30分くらいしか会えなかったのですが話をして、そうしたら非常に大乗り気なのです。実は、高橋はるみさんの選挙対策委員長をやっているのです。道州制の素案というか元になっているのは竹中平蔵さんと武部さんがつくっているわけですね。自民党のマニフェストをつくりながらですね。じゃあ高橋知事を連れてくると、その代わり俺も出させろという、今回は2人だけでいいのなら、俺の方が詳しく知っているのだというので、いまちよっともめています。出さないなら連れてこないなんて、さすが政治家だなあと。竹中平蔵も連れて来たいと、いまはそこを整理しなきゃいけない状況になっています。

おそらく日程調整で来年の2月になってしまうのですが、さっきいったようなテーマで、第15回のセミナーが管内26市町村全部ではないですが、かなりいま関心が高まっています。一応、中間的な地域連携の取りまとめもあるのじゃないかと、各市町村が協力的に、我々があれこれ忙しいものですから、ぼやぼやしていたら、この部分については私たちがという、その部分では連携はかなりいいかたちで進んできています。だから、市民レベル、町村民レベルとなると検証していませんが、このセミナーや大学間交流協議会に対する認知度は高まりました。実質的にどういったことで、どういった範囲で理解されているかということ、この機会にアンケートで調査すべきであろうと計画しているところです。

現実に即していかなくはないということ、一部の機関、一部の人たちだけの反応だけで簡単にこうだと結論できない。あくまでもやっていることは泥臭くて地道で、地域現場でやっていますけれど、せめて総括は科学的にやろうじゃないかというスタンスで。こういったものを科学的にやるというのは難しいですね、そのあたりの角度と方法をもう1回整理をして進めようと思っています。

農大での認知

姉崎 出発点をおうかがいしたのですけれども、その意味では事務的に農大が少し中心軸に、事務局を担っているわけですね。

田中 大学間交流連絡協議会の事務局はずっとこちらに置いています。

姉崎 それで、かなり重要な役割を果たしていた北海学園が、札幌へ戻ってしまう。それから道都も予定よりも早く移転してしまうので、そういう意味でも 2 つ欠けると結構大きな打撃になる、総合大学でいうと一部の分野が欠けてしまうということがあると思うのですけれども、先ほど科研のこともあって、発展的に認知されていますし、オホーツクレベルの後押しがあるのですが、農大自身はどのように認知されているんですか。

田中 有志が集まって、いわゆる任意というかたちなので、農大当局そのものが本格的にかかわっているということはいまだにありません。これからどうなるかは分かりませんが、いままでも大学が法人も含めましてかかわる、主体性を持つというようなことは一時期あったのですが、その頃は我々の方で、正式な公的機関でやられるようになったら、ある意味でアイデアもフレキシビリティがなくなる、目的的になるのじゃないかという心配もありまして、一番やりやすいのはこの大学間交流協議会を通してやるのがやりやすいんですね。

大学間の単位互換という話が出だしたときに、それは我々大いに賛成したんですけれども、やっぱり組織、経営という理事者側になってくると、ある一定の目的が出てくるんですね。相手のことも思うんですけれども、こちらの方も先に進めてしまうものですから、うまくいかないんですよ。それはまずいんじゃないかということで、公式じゃなくして、我々は機関として、大学間交流協議会として協力はすると、したがってそれぞれの大学と単位互換の協定を結ぶときに、その条件を出すときに、お互いに五分の条件を出し合うということが必要なんじゃないかと、その調整役を我々がやっていました。単位互換というのは公式な協定ですから、国家同士が云々やるときなかなかうまくいかない、その時に NGO 的なものが間に介在すると比較的部分的にはうまくいくというようなこともあろうかと思いますが、我々はたとえていうなら NGO、NPO 的なファンクションで動いたというのがあります。結果としては、いまのところは北見工業大学との単位互換だけが正式に決まっています。実質は工学です



から、単位を取りに行くのは学生たちが主体ですから、機械工学はあまり関係ないとか、環境関係で毎年単位互換をやっています。本当は五つの大学でやれば一番いいと思っています。やっぱり現実的には難しいですね。

ただ、十何年間やっていく中で、ある一つか二つの目的を目的的に達成しようとするときには、どちらかというとなんかじゃなくて、例えば、道が支庁が入ってとか、公的であった方が達成度が高いと思うのですが、その代わり今度は可能性がなくなってくる嫌いがありまして、どちらがいいかということで、ゆくゆくは一番いい連携の組織というのが考えられるべきと思うのですけれども、それも我々の課題かなと思っています。一つのモデルケースになりうるような方向に進めていきたいというのが我々の考えなのです。半官半民とかいろいろなやり方はあるでしょうけれども、非常に曖昧なカタチで、なおかつピシッとした公的な部分もあって理想に近いものができるものかと思っています。

姉崎 “環オホーツク海圏” というのは国際というような評価になりますし、それから、十数回のシンポジウムの中にはオホーツク圏の大学でやるけれども、ゲストというか、参加される先生には、道内の他の地域、札幌であったりというようなところがあるのでしょうか。中身的にはかなり普遍的な内容でやっていると思うのですけれども。

田中 そうですね。地域の課題といってもものすごくいっぱいあるわけですね。

だから我々は、集約できる課題をもう一回整理するというかたちで、一般論ではないのですが、基本的にはどう考えればよいのかというようなところを重視しながら、個別具体で細かい問題解決の方法を考えれば、それは別途各大学で関連する機関とか研究所を持っているところに行き、それで具体的にやればいい

んじゃないかというようなことでやっています。

連携の広がり

田中 これが一番古いやつなんです、研究者リストをつくっているのです。これを管内に配布しているのです。このデータベース化をしようということでやっているのですけれども、原始的ですが、各大学の先生たちに一人ひとり研究テーマとか何ができるかとか、何をやってきたか、そのようなことを細かく具体的に書いてもらう。あまり硬すぎるとだめだから、この地域に持っている夢は何ですかとか、市民の願いとか、夢を語りながら酒を飲むこととか、でもそれが気に入って連絡してくれるという人もいますね。一農家のおばさんが、私たち主婦が集まって紫蘇を加工してジュースをつくるが、それ以外に何かワインとかできないだろうか。そういうときは、われわれの協議会の事務局に一本連絡してもらえば、たまたまうちの食品科学科の教授がそういう研究をやっている、個別にそういうようなことをやったり、そういう問い合わせがずいぶん多いです。

五つの大学の先生方を紹介していますので、うちの事務局、農大においでしていますけれど、そこに電話してもらえばそこから、例えば電気関係のことで悩んでいたといえ、工大の先生が行ったりとか、その先生に連絡して会ってくださるかということで、個別にそれぞれ行きます。本当にお互いに連携をしあっていくということであるならば、我々の方でも素顔を見せなくてはいけません。というのがありまして、出する範囲の全部を出そうと。それでいくらもうということはないわけですが、

姉崎 中央で情報が集まっています。そこからもつばら流されるようなものを持ってくるのではなくて、逆にここからいろんなものを発信されているという考えだと思えるのですが、オホーツクというのはいまのところ支庁の範囲ですが、呼びかけはやっぱりオホーツクの範囲ですか。釧路などでは道東という広い範囲でつながりたいという意識があったりするのですが。

田中 それは我々の弱いところなのでしょうね、このオホーツクにこだわってしまうのです。二つの大学が残念ながら撤退されてしまうと、機能、ファンクションとしては連携を取れると思うのですが、それは続けていこうと思います。

数年前にも何回か出ているのですが、もっと範囲を広げるということはどうだろうと、実質的に難

しいところはあるのかもしれないけれど、釧路、帯広方面へ広げてやったらどうかと、ずいぶん前に出た話では、北海道全部できないかなという話でもしました。北大あたりとも連携してとかですね。ただそれはやっぱり、北海道大学はそのものが総合大学ですからね、別に相手方が連携の必要がないといわれたらどうだろうか。だからいってみなきゃいけないと、これから1個の大学が地元から撤退するという状況の中で、我々はもっと連携の範囲を広げていくことも実際考えているところなのです。それはこのセミナーを始めて4回目、5年くらいたったときに、日本学術会議北海道支部の方から、これに協賛させてくれないかという依頼がありまして、いいですよ。学術会議はほとんどが北大の先生方ですが、できるんじゃないんですかということも申し上げたんですが、地域の規模の適正というものがあって、あんまり大きすぎると難しくなってくるという話もあって、じゃあどうぞということで、学術会議にもずっと協賛をいただいているんです。毎回道東には支部長さんに来ていただいて挨拶をしてもらいます。島本先生という北大の農学部の、去年、一昨年北大を定年退官されまして農大の嘱託教授になられた方もこの縁なんですね。

こういった連携の中から人的なつながりが生まれてきて、いま大学は生き残りというので大変厳しい状況の中で、ユニークな、現実に即応した科目、カリキュラムをつくろうといったときに、それができる先生はどこにいるのかといったときに、東京から講演に来ていただくとか連絡が取りやすいのですね。結構そういった方が非常勤で来ていただいているという現実もあります。非常に助かりますね。もしこういうことをやっていなかったら、それこそ市町村の方たちと同じ状態でどこに問い合わせたらいいのだろうかという、我々も同じことがいえるわけです。そういう意味では非常に連携の質が高まったことで範囲も広がったり、そして実も得たという感じがしています。

実は、小学校の先生なんかには、北大とか札幌の大学と連携とかは大学間交流協議会にはできないかと、しきりに何年も前からおっしゃっていただいているのです。だからいよいよその時期になってきたかなと思います。一步一步こういったことを積み重ねていって、そして具体的にどういったような方向で何ができるのかを見定めていくという意味では見えてきたかと、ひょっとしたらそういう可能性があるということですね。

地域への還元、アイデアの具体化

姉崎 地域社会への還元の仕方いろいろあるのですけれども、産学連携はずっといわれていますけれども、それだけではなくてある種の公益性みたいなものを還元するという意味で、自治体が大学に求める関係性みたいなものがあって、北見工大の地域共同研究センターの内容をみるとハイテクだけではなくて、ローテク的な部分も考えると、比較的自治体との連携も大きな意味があって、産学連携推進協力委員というもの各自治体ごとに置かれていて、そのネットワークもなかなか面白いアイデアと思ったりするんですけれども、そういうのはひょっとするとこういったところから出ているのかと。

田中 そうですね。さまざまな効果や成果が僕は上がっているように思います。単にセミナーを毎年やって、勉強になったなあ、面白かったなあというだけじゃなくて。

一つの例としては、5年くらい前ですか、あるメンバーの方から3市だけが地域じゃないだろうと、町だってあるんじゃないかと、村だってあるんじゃないかと、じゃあ出前講座をやろうと、出前講座は何回もやるんですが、まあ主催、開催地そのものを使うということで、斜里町でやったんですね。環境を一つのテーマにして、おそらくこの地域でははじめてじゃないですか、それが契機になって斜里町がISO14001を取得する。この地域では初めてなのですね。それはやっぱり成果です。

さまざまなアイデアが出て具体化している、具体化していないものの方が多いのですけれども、とにかく一つ一つ目指していくことが地域の教育にもつながっていくのじゃないか、具体化した成果が上がることは、教育の成果が上がっていくことなんじゃないかなと思うんです。かなり具体化しているんですけれども、やったことの量に相対してちょっと少ないんじゃないか、報告書にするだけじゃ意味がない、個々の問題で具体化できないのか、何が問題なのか、そういうのもこれから探っていくということがこれから必要になってくると思います。

そうなってくると、もちろん地域特性というのがありますから、全部というわけにはいかないのでしょうけれども、そういったところから僕は地域が広がってくるのじゃないかと思います。帯広の方まで行く必要性があったり、ベンチャーとか、そういったようなことが問題になってくれば、札幌の方まで広がっていくというようなことにもなっていくのじゃないかと。ア

イデアだけで連携していたら、数は多くなるけれど、そういったことではだめだという気がしているので。何のために連携しているのか、それがなかったら連携し合って良かった、良かったというだけの話になってしまう。

商売柄、各自治体から調査とか委託研究とかいっぱい頼まれるのですね。そうすると時間がない中で地域貢献でやるわけです。そして、やったことが報告書になって役所の棚に並べられる。自分の話も報告書になって並べられているのです。何か墓標を見るみたいな感じでね、こりゃ墓場だな（笑）、この1回死んだ人間たちを生き返らせなきゃいけない、そのためにどうするか。協議会のメンバーですけれども、依頼されて実際に引き受けるとき、一つの条件として、具体化する方法まで提案したいからいっしょに考えることを約束してもらう。100万の予算があるからこれを何とか年度末に消化するためには、大学の先生を呼んで話して、いっぱい人が来たからわーっと飲んでよかったよかったと、そういうのは一切入れませんと。そういうお金を使うのだったら、具体化するための方策をともに考える。お金があつたらそれに使いましょうと。こういったことを通して、かかわった研究者が教育されていると感じます。

姉崎 それぞれ個別にやられている事例をいったんこのセミナーに持ってきて、課題を整理して、共有して、共通項目を探って、それをまた発展させるというやり方は、かつて1960年代に伊那の方で行われていた信濃生産大学というような、ああいうやり方と非常に似ていますね。

田中 そうですね。そういうふうにいわれます。

姉崎 自治体問題研究所がオホーツクにはあって、それでそこにいらっしゃるいろんな自治体の面々で個性的な方がいらっしゃって、そういう意味で、地域の顔というのが見える関係にあって、道庁が地学連携というイメージが、比較的オホーツクの場合には我々もイメージしやすいけれども、他で地学連携というと、去年函館を調査するとややそういう動きがあるのですけれども、やや上からトップダウン的に大きな開発構想があって、そこに大学が乗っかっていくというようなことがあるので。

田中 公的な組織が真正面から加わりだすと、これは行政でも大学でも同じなんですけれども、公的にかかわりだすと、どうしてもそういう傾向というのが自然に出てこざるを得ないんじゃないかと。そこなんです、我々が心配しているのは。そうじゃないかたちで

進めていきたいという希望があります。

異分野の研究交流

光本 当初の目的であった研究交流できる環境、自分自身の研究をやる場としてやっぱりここにいると不利だけれど、東京にいると有利だと、そういうこととなるだけでなくしたいと、最初はそういうことで発想されたと思うんですけども、そういう点から見ると、むしろ自分の近い分野の人と交流したいと思うのが通常だと思うのですが、相当違う分野ですよ。おそらくこういうのがなければ出会わないような方々との交流に進んで行かれたわけですけど、当初の狙いは、やっているうちにむしろこっちの方が大事というか、目的自体が変わっていったのか、そのへんはどのようなのでしょうか。

田中 研究者同士の交流は毎年やっているんですよ。これもやろうということで。ただ異業種なのですね。同業種交流だとやりやすいですけども、異業種交流になりますので、毎年この時期、今年もそろそろ企画を組んでいるんですけども、各メンバーが1泊とか長いときで2泊くらいで研究交流会を毎年やっているのです。去年がちょっとズレて今年の1月頃になってしまったんですけど、グローバリズム、市場原理主義というテーマで。僕は経済なものですから、僕が報告したらそういうふうになってしまうんですね。そうすると違った視点からの報告がいくつもでるわけですよ。化学をやっている先生の報告なんかヘテロの視点からも出るわけです。そうすると、異種、亜種の接合、融合がものすごく新しいものを生み出すんだというような報告だったんですが、我々は専門じゃないからよく分からない。化学の世界では、顕微鏡の世界ではそういうふうに見えると。人間社会もそうじゃないかという、全く視点が違うところから報告があるわけです。ええっ?! っていう。同業種交流だとだいたい同じ方向でやっていくわけですよ、それで、ああなるほどと。それが全く意表を突いた角度から出てきて、もの凄いアイデアになるということがありますね。かえってそっちの方が刺激的で、ある種面白いという感じがありますね。

地理学の専門で「飛び地」の研究を主にやっている先生がいらして、東京の土地が実は長野にもあって、こう位置がこうで歴史がこうだああと。なるほど、合併問題なんかで非常によく分かるんですよ。その飛び地があって、それは必然的に、もしそういう交流で勉強しなかったら考えられないという、いくつか具

体的な話があるわけですけども、そういった中で、これだけ経済が複雑化していった、アダムスミスの時代以来のいわゆる市場概念とか要素還元主義のやり方が通用しなくなったときに、複雑系という考え方というのが必要になってくる。いわゆる線形から非線形という、これは工大の先生からヒントをもらいましたね。いまそれを整理しているところなんですけれども、どういう成果になるかはまだちょっと分からないですけれども、それを論文にしていこうとか、異業種の交流の方の面白さ、それと実績の意味での成果というのがありますね。

同業種でやっていくと行き詰って、デッドロックしてしまうところもあるかと思うんですけども、意表を突かれるような角度からのアイデアをインスピレーション的にもらったりとかというのはあります。そういう意味では非常に面白いので、研究者交流会は続けています。

それで、研究者交流会を学会的なかたちにするのかどうかというのをいま考えているところなんです。15周年ですから、これでいままでのことをすべて総括しようという話になって、その際に、副産物ではないですが、何らかの一つの方向性を持った学会がつくれるんじゃないかなと考えているんです。それはまだ具体的には整っていませんけれど。方向性としては、研究者だけでなく、学生交流会も毎年それぞれの大学で、例えば北見でやるときは北見工大とか北海学園の学生がリーダーシップをとって、他の大学のひと泊2日でやる。やっぱり彼らも彼らなりにすごい刺激を受けていたり。

上田 学生が研究交流というと、どんな感じなんですか?

田中 研究とまではいかないにしても、例えば、うちの環境問題に関心のある学生たちが多いとすると、その交流会の中で環境問題について議論し合うわけです。研究会まではいかないにしても、そういう普段自分が勉強し、なおかつそこから出てきた関心事について、共通のテーマで議論し合おうじゃないかというような交流なんです。

上田 コーディネーターがいたりとか。

田中 それは担当でいます。今年は変わるんですけども。北見工業大学の山岸教授がその担当で、ずっとこの何年かやってきたんです。もちろんそれをサポートする教員は各大学の教員が持ち回りで2人ずつくらいです。我々がそれを担当したときには、学生たちの議論には口を出さないと、一切口出さない。相当ズ

レているなと思いながらも、口は出さない。研究者だけじゃなくて、学生交流会も毎年やっているんです。

光本 いつ口を出すんですか、夜ですか？

田中 飲みながらね（笑）。議論の前提がおかしい、とかね。

上田 自主参加ですか。

田中 そうです。

光本 何名くらいが参加されますか。

田中 だいたい一つの大学から 10 人から 12 人くらい来ますから、50 名くらいになります。

協議会の組織・運営

光本 学生の交流会も、このオホーツク・大学間交流協議会の役員の方が企画されているのでしょうか。

田中 最初はそうです。研究交流会はもちろんそうですね。実行委員がかかわって企画をするというかたちになります。

光本 実行委員会をつくるんですか。

田中 取り立てて実行委員会というのは。担当校を決めるということですね。

光本 なるほど。その人を中心にあとはお手伝いというかたちで。

田中 その成果も集まっていますので、それもまとめて 1 冊にしたいと思っています。

光本 協議会に加わる先生方は徐々に増えてきているのでしょうか。

田中 年度によって、増えたり減ったりということあるんですけど、だいたいならすと 100 名前後で推移しています。機関で、大学で全部やったらものすごい数になって、組織の問題から考えなきゃいけなくなると思うんです。それから自主的じゃなくなる部分もあって、それこそ任意団体にしてよかったなど、実はいまは思っています。やりたい人がやっているわけですから、やりたくない人が入ってくると問題があるわけです。

光本 どうしても義務的になりますよね。何人出さなきゃいけないとか。

田中 それで一ついえることは、日本の大学独特の問題があって、こういった地域問題とかこういったことにボランティアにかかわるということは、よっぽど物好きだ、時間は潰れる、要するに日本の大学の評価基準は教育と研究、研究では業績本数ですよ。そのぐらいの時間があつたら俺は論文を書くよと、実験をやるよということだと思っただけですよ。それを時間を割いてまでやりたいというのは、かかわってくる人たちとい

うのは、相当なパワーであり、エネルギーなんですよ。そういう人たちに限って、業績もボンボン上げているんです。時間があるから業績が上がるわけじゃないなと見ていて思いました。

そういうのに刺激されたわけではないですけども、3 年ぐらい前から、本当にいろんなことをやりながら、僕も負けてはいけないなと思ひましてね、学位論文をまとめて、去年出したばかりなんです。学位論文の中にも、さっきいった研究者交流のアイデアというのが生きています。そういう意味では非常に感謝しています。

上田 協議会の構成員はだいたい 5 大学に平均的なんですか？

田中 いや、ばらつきがあります。

上田 どこが多いでしょう。

田中 やっぱりうちが 1 番多いですね。というのは、事務局があるのと、思い入れもあるからだろうと思うんです。何でやりたいんだっていったら、かなり強引に誘われているんですね。お前、研究ばかりやっていたらバカになるぞとか（笑）。それで 1 番うちが多いという感じですね。それから北見工大ですかね。北見の学園さんはちょっと、いろいろな事情を抱えていて。ただ、これは増えたり減ったり、人数にあまりこだわっていません。ばらつきは別にあってもいいんじゃないかと、これが大学の決定であれば、人数も一律でしようけれど、このばらつきが一つの特徴だと思いますしね。

上田 協議会の、講師を決めるとか会議をするというのは、事務局の東農大に集まって決めるのでしょうか。

田中 毎年セミナー開催地が変わりますので、その開催地で総会をやることにしています。だから、まず総会をやって、前年度の事業報告をして、今年度の事業予定を、そのときに企画会議みたいになるんですよ。総会が突然ね。

上田 企画会議になるんですか？

田中 なりますね。だから長いですよ、総会は。午前中 10 時から夕方くらいまでやって、それで決まらなくて、紋別でやると泊まるしかないわけです。そのそれこそさっきの酒じゃないけれど、さっきの話はおかしいだろうとか、そこで決まっていくことが多いですね（笑）。公的にすましてやっているときには黙っていて、さっきいったことをおかしいだろうとか（笑）。不思議なことに、翌日、午前中に総会をやります。そのときにはすっとんと落ちているんですね。うまい具合に、ガス抜きになっているんでしょうね。



光本 事務報告だけで終わる総会とはだいぶ違うんでしょうね。

田中 やっぱハードですよ。セレモニーみたいに、シャンシャンでやればいいんでしょうけれど。そういう意味では非効率的、スマートじゃないですね。

姉崎 オホーツクのいろんな分野の集まりも必ず宿泊が伴って、それがいいと聞きますね。

田中 ここ3年くらい、リカレント、生涯学習というのをやっていたわけです。3年前に道民カレッジからうちに問い合わせがあって、そこから運営委員を出してくれという。結局僕が、北大では町井先生が委員長でやっているんですけども、おっしゃる通り道民カレッジの運営委員会をやって、夕方4時半ぐらいになると、結論はこの次ということで、とかいって。皆さん帰ってしまうんですね。僕は1人で、もちろんいろいろ知り合いもいますし仕事もありますので、そのまま目一杯ならなくてもいいけれど、議論し合えば会議をする必要はないんじゃないかと思うんです。わざわざ飛行機で行っているわけですから、それは不満ですけど。スマートではあるけれど、じゃお疲れ様でした、といって別れていくのは、何か素っ気ないなあという感じはあります。もっと泥臭くやったらいいんじゃないかな、札幌の会議もね。

姉崎 3市も今回移動してみてもですけど、多少移動がありますけれど、車があればちょうどいい距離でもあるように思います。

田中 そうですね。交通機関、乗用車があればだいたい困らないですね。ちょうどいい距離だと思います。

地域の参加者の関心

上田 第1回目に280名の市民の参加。第1回はここであったんですね。そうすると、網走市の方が中心だったのか。

田中 正確ではないかもしれないですけど、基本的

には3市の方たちが多かったです。

上田 動員をかけたのかなと思ったりもしたんですけど。

田中 それもあるでしょうね。実際お金を出しているという手前もあって、動員もかかったと思います。そこらあたりは我々はやってないものですから分かりませんけれども。

ただ、第1回目から議論がものすごくあったんですね。参加された方々から、三つの分科会に分けて、一つの総会で、基調テーマでやるんですけども、ここから分科会はその形式がずっといまに続いています。そういう意味では、動員をかけられたのかもしれないけれど、かなり実質的な議論はされました。

光本 動員だけで集まる数字とは思えないですね。

田中 関心もあったのかもしれないですね。それからずっと減っているかという、2回目、北見のときは、少なかったのかな。それでも400人。3回目の紋別、道都大学でやったときは800人くらいですか。どんどん増えている。そういう意味では関心がどんどん高まったと思います。平均して300~400人くらいで毎回推移しています。

伊藤 市民の方々はどんなことに興味をお持ちなんでしょうか。

田中 それは自分が抱えている問題とか、関心がそれぞれあって、その地域で、開催地の人たちも実行委員に入っているんですよ。

上田 市民の方も。

田中 全員じゃないですけどね。入りたいという方、農協の人とか、漁協の人とか。まったくの市民、主婦という人も入っています。

セミナーのテーマを最初から持っているんじゃないんです。何しましょう、どういう問題がありますかといって、さまざまに出るわけです。だいたい集約したところで、こういうかたちでどうでしょう。だからそういう意味では市民の人たちは、その共通のテーマにも一応自分の問題関心を見つける。一番多いときには六つぐらいの分科会を設けるんですね。例えば、農業関係とか、中心市街地の活性化の問題であるとかの分科会です。400人来たとして五つの分科会があるとすると、平均して70人ずつとか、偏りがあるんですけど、少ないところでも20人はいる。そこでものすごい議論をするわけです。関心がある分科会に行きますからね。そんなこと先生いったって現実はどうですよとか、逆にやられたりするわけですね。それで、こっちも勉強する。

最初から我々が形式的な議論はやめましょうといっているものですから、その意味では市民の人たちが持っている課題とか、問題意識をそれぞれの場で共有し、解決はしないにしても、ちょっとヒントになったとかいって帰っていく人は結構多いですね。もっといえば、あの先生の発言は非常に面白かったし、有益だと思うから紹介してくれと。個別に相談に乗ってあげたり、そういうようなこともあります。

議論の積み上げと集約

姉崎 各会微妙にテーマが違いますけれど、かなり系統的にやれば、それなりに議論が蓄積されて高度化して、問題解決のより高いレベルでということがあるんですか。

田中 ありますね。報告書もあらためて15周年記念誌を出そうということで、いま報告書を全部整理しているんですけど、やっぱり共通する部分がいくつかのブロックという分野に分けられるんですね。ずっと見ていくと、かなり積み上げてきたものがありますね。これは結果論ですけど。

だいたい参加しているメンバーも、我々の方は同じメンバーが出ていますので、そうすると、最初的时候にはそうでもないでしょうけれど、それを10回ぐらい同じような場面にでると、それはこういう問題はこうなんです。3回目のときにこういう結論で、こういうふうに分かっているんですよ。そうはいつでもこの問題はどうなんだ、というかたちで積み上げていくんですね。だからある意味では、似たような分科会に出席し続けている人から見れば、なんだ金太郎飴じゃないか、というのもあるかもしれないけれど、決してそういうことじゃないんですね。積み上げて、かなり課題に接近してきているという感じはしていますね。

ただそれは、やっぱりある程度きちんとしたかたちでまとめなければいけない。それも我々の課題なんです。報告書にはなっているんだけど、もう一回集約するわけですね。

姉崎 その過程が一つの重要なことになってくる。

田中 そうですね。

上田 準備に半年ぐらいかけちゃうのかなと思っていましたんですけども。

田中 そうですね。だいたい毎年、この夏も年1回目の総会は早めにやるんですけど、それからだんだん実行委員会を組織します。そうすると、毎年10月から11月に開くものですから、5月6月に実行委員会

が立ち上がって、最後迫ってくると月3回ぐらいあるということもありますけれど、それで整えていくというかたちになります。

主催地の市町村の職員が事務方のようなかたちで加わったり、去年は佐呂間町でやったんですけど、期せずして佐呂間町の堀町長が、率先的に毎回の委員会の議長役みたいにして、行政の人というのは出てこないと思っていたら、毎回出てくる。それで議論を主導していくわけです。それは先回の委員会で決まったことでしょう、とかやられたりして(笑)。それだけ、地域でやるときには成功させたいという思いがあるんでしょうね。その思いが地域の人たちにも伝わるんでしょうね。漁協の理事さんとか、目の色が変わってくるわけです。だから、おぎなりの何か肩書きを持った人がずっと座って、いかがでしょうか、結構です、しゃんしゃん、これはないですね。かっこよくない会議なんですよ。何か引っかかってね、それこそバトルみたいな会議で、言いたい放題いうものだから、まとめる方が大変でね、だんだんそういうふうになると、一主婦だという町民の方が、一番声高に叫んでいたって、そういうことも再三あります。

上田 議事録はとられるんですか？

田中 はい、とります。テーブルを議事録にして。事務局だけではどうしようもないので、僕のゼミの学生とかを連れて参加させるわけです。卒業論文で地域問題とか、そういったような地域活性化の問題とか関心を持って、それを書きたい学生が本ばかり読んでいるんですよ。実際そういうところに連れて行くと、本では「地域住民の合意、コンセンサス形成が大事である」と一行で書いてある。こんなの無理でしょう、とかね(笑)。この本は違うとか、現場で学ぶわけですね。何か効果が出るような、教育の面で効果が出るようにしたいと思っているんです。行きたくない者を無理に連れて行くということはしません。こういうことがあるからどう？ということ。

光本 セミナーの記録とは別に会務に関する文章もおありだと思いますけれど、それは最初の方から先生のところにあるんでしょうか？

田中 一応それは整理してあります。

光本 どのくらいかなり膨大な量が。

田中 そうですね。段ボール二つぐらい。

光本 そんなにあるんですか。

田中 それは整理するのがイヤになってくる。もうこれでいいじゃないか、みたいな。その経緯を見ようと思えば、それは見えるわけです。

光本 少しまとまったものがあつたら、そちらも見せていただきたいと思います。記念誌が出てからの方がいいですね。

田中 整理していただければありがたいです（笑）。

連合大学院構想

石山 連合大学院というような話について、少し詳しくおうかがいしたいですけれども。

田中 せっかく5大学で連携しているわけですから、学部レベルだけではなくて大学院レベル、研究者レベルで連合したらどうか。そういう単純な発想で話が出たんですけれど、最近では、大学院とは違うかもしれませんけれど、ダブルディグリー、連合大学院を実現化するにはどうしたらいいか。そっちの方に考え方が移行してきていますね。

21世紀になってから、一つ一つの問題が複雑化して、多様化しているんですよね。俺は一つの専門で、例えば、金融論をやってきた。でも、金融論だけじゃ分からないというのがいっぱいあるわけです。アメリカなんかでも、金融論を勉強してきた学生が、いわゆる工学の統計手法を勉強したりというのがあるわけです。金融工学というのもありますし、二つじゃなければいけないというのじゃありませんけれど、やっぱりこれからはダブルディグリー、ダブルメジャーの時代になってくるんじゃないか、それにわれわれの組織がどう動いたらいいか、具体的にとりくめるかというようなことが課題なんです。

ちょうど学科長になってしばらく経ちましたけれど、うちの大学では、とりあえずやってみようかということで、近畿大学とか立命館大学とかと連絡を取り合いながら、その可能性を探っているところなんです。それがある程度うまくいくようになったら、もう少し緩やかな連携というかたちで、この組織でやれないか。最初はモデル的に、もちろんモデルといっても失敗はできませんけれどね、それをいまやっている最中です。話はずれるかもしれないですけど、最初に日赤看護大を開設するときに、やっぱり視学官が来て、こんな田舎で共同研究なんかできっこないじゃないですか、こんなところに大学をつくる意味合いがどこにあるのかとさんざんいわれたときに、ちょうど我々が看護大にも参加しないですかと話に行ったのが10日前ぐらいだったんです。そこで、そんなことないですよ、我々が置いてきた資料を全部出して、これだけ大学があつてこれだけ連携しているんですよと、私たちがこれから入ります。大丈夫です、共同研究はいくらでも

できる。ああ、そうですかと。

光本 いった手前、入らないと。

田中 こっちにも入ってくれたというのはありますけれどね。やっぱりそういったものが将来大学院ができる时候にも可能性としては出てくる。連携大学院構想です。

それぞれはすぐ思いつくんですよ。それを具体化できないんじゃないというもので思いついて。例えば、インターネットだけで、通学しない大学院というのがあるわけです。スクーリングをしない大学院というのがスイスにもアメリカにもあります。1回も大学院に行かずにレポートのやりとりだけでドクターを取ったというのが。そういうのができないのかと、いまっているんです。我々の大学間交流協議会でやるとか。

国際共同研究

田中 先ほどの国際的な、“環オホーツク海圏”とか、環境がメインになっていくと思うんですけども、環境研究というようなことで、例えば、アムール川のそばの工場群なんかを見てみましても、ものすごいですよ。垂れ流し状態で、ああいったものがこっちへ来るんですよ、流氷として。これは大変な問題だなあとか、中国の東北部でも砂漠化とかね。環境という意味では、国際的な、多国間にわたる環境問題の研究所がないというので、国際環境研究所をつくろうじゃないかとかね。向こうの研究者と共同しようということでも話もしているところなんです。

イメージとしては、サンタフェ研究所というアメリカの民間の研究所があるんですけどここには世界各国からノーベル賞クラスの研究者が来ているんですよ。地域はものすごく環境がいいわけですよ。プレッシャーもないし、非常に自由な創造力が持てるということで、超一流の人たちが来ている。このあたりはもっと環境がいいんじゃないか。だったらそういう国際環境研究所というのでできるんじゃないか。

いま我々がかわろうとする、つくろうとする連携は、専門家に対して申し訳ないんですけどね、北見工大の先生が怒っていましたがね、俺たちだって研究員になれるのにつて。でも、みんな事務局（笑）。国際クラスの先生たちが研究員。何だよこれは、研究者じゃないのか、といって怒って帰った人がいました。それはちょっと整理しなければいけないんですけどね。そういうような研究所もつくりたい。それは前々から連合大学院とともにある構想なんです。

姉崎 知床が世界遺産になっていることを含めて、少し違う領域での学際的なものがないかということで、地域がかなり期待感をもっている。

田中 そう思います。実際に、僕は斜里町に住んでいるんですけども、環境基本条例とか、いま世界自然遺産の承認委員会の調査役をずっとやってきたりして、町長が「ここにそういう国際環境に関するような研究所とか大学ができないんですか」といわれたんですね。「それはできるかもしれないけれど、お金がないでしょう」といったら、「できません」。お金は別にしても、ここだからできる機関とか、ここになければいけない機関というのが当然あるわけです。そういったものもセミナーを通しながら、進めていきたいと考えています。

事務局の構成

上田 この協議会の中の事務局は常駐の方がいらっしゃるのか、やっぱり教員の方がされているのか。

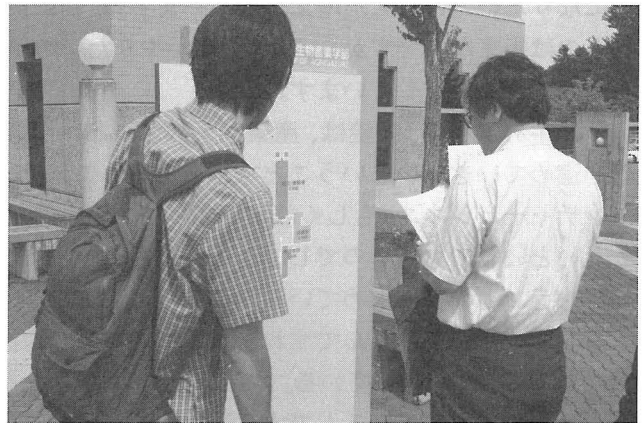
田中 それも課題なんです。こういう仕事というのは、特殊といえば特殊なんです。ものすごい煩雑で、予算整理とか、大変な時間を割く。研究者はそういう能力が低いんですね。

非常にありがたいことに、うちの黒瀧さんが、ずっと始まって以来、事務局長なんです。我々も“終身事務局長”といっているんです。いつまでやらせるんだ、と怒っているんですけど、彼がずっと常駐し、お金を払っているわけでもなんでもないんですけども、とにかく事務局長としてやってもらっているものですから、1人事務局長で、ちょっと組織が複雑になっているんですけど。

それから、セミナーを開催するときのセミナー実行委員会というのは、実行委員長がその主幹の先生の方が実行委員長なんです。事務局長はその大学の先生にやってもらいます。セミナーの実行委員会は開催地の主幹校に移っていくわけです。我々は「本体」といっていますけれども、協議会本体の事務局は農大、だから当然、お金なんかが実行委員会できるとなったときは、協議会の本体からの支援金を出す。報告書とか、リポーターとか、もしくは基調講演とか、いうようなときに、われわれもやる場合もあるわけですね。そうすると、コメンテーターとかにも全部お金を出すんです。大変申し訳ないですけども、それを半分カンパしてください。

光本 半分でいいんですか（笑）。

田中 全部やるという人はありがたいですが、全部と



いったら怒るでしょうから（笑）。それはずっとストックされていくんです。基調講演はだいたい外から来てもらうんですが、前は、沖縄の宇井純さんに来てもらって、それはまさかカンパしてくださいとはいえないものですから、いただけないんですけども、同じように、どうしても手当てができなくて、いちばん近い専門で僕に当たったときに、30万くらいでいったら、お前にはもらう資格がない。どうして資格がないのか分かりませんが（笑）。

上田 先ほどの研究者リストなんですけど、この協議会に参加されている100人前後の研究者のみですか。それともそれ以外の？

田中 有志の教員だけです。

地域・大学間連携の評価

姉崎 私学の場合、経営問題というか、法人の考えと教学レベルとの考えの間で相違が出てきたりすることがあると思うのですが、そのあたり農大の場合は、こういう自由な活動やられていますけれども、そのへんの評価、教員に関する研究評価というのはどうなのでしょう。

田中 いままでははっきりいって、ものすごく低いです。大学法人もしくは、大学的な観点からいうとほとんど評価はゼロでしょうね。逆にマイナスの評価の方が高いですね（笑）。勝手なことをいって、何かやってきてはこっちへ持ってきて、施設は勝手に使うしとか。

ですが、この何年かで、私立大学も、特に地方地域に立地する大学の地域性が重んじられるようになってきています。地域貢献ということが非常にいわれるようになってきて、おそらく去年あたりから、ここにかかわっている教員に対しても高くなってきているのではないですかね。だから、いままで一切関心を示さなかった人が僕も入れてください、参加したい、会

員になりたいという人が増えてきていますね。別に来るものは拒まないですから。ただ、何がやりたいのかということは規定しています。

一昨年あたりに、網走は、産業クラスターという構想を進めていきたいということで、もちろんこれは、ベンチャービジネス、もしくはビジネスモデルを確立したいというのもあるのでしょうかけれども、その範を、フィンランドなどに求めている。それで、向こうにしょっちゅう行っているんですね、市民の代表のようなかたちで。市長も行っている。向こうからもヘルシンキ大学の先生が来ているんです。そのときに、大学間交流協議会にも協力の要請があり、行きました。自由参加なんですけれども、そのときに農大の先生たちも結構参加されて、何人かは聴衆ということで聞きに来たようです。

そのときにヘルシンキ大学の先生が、ああいうのは難しいですね、フィンランドの産業クラスターというのは、社会構造上の問題があって、きちんと社会構造を再整理しているんです。新共同体論というようなことをいいだして、共同体問題とかに詳しい先生はいらっしゃらないですかということで、通訳をしている先生が、僕を知っていて、「田中先生、新共同体というのはどういう意味ですか？」と。よく分からない。それで説明したんですけれども。そうしたら、ヘルシンキ大学のコッパという教授に、「そうだ、お前の言う通りだ」とかね。それでやりとりしているうちに、「お前は大学の教員か？」とかいって、コッパ教授は、「ヘルシンキ大学では、地域に貢献しない教授というのはものすごく評価が低くなって、契約制が入れられたときには、もう契約はしないという状況なんだよ」と。そこで、「我々だってこういうのをやっている」という話をしたんですよ。負けん気を出して。そうしたら、「お前は偉い」(笑)。「じゃあ、お前大学の中の地位は高いだろう」。「いちばん低く、文句ばかりいわれているんだ」といったら、「何でそうなるんだ」と、「お前、ヘルシンキに来い」と、「お前だったら、ヘルシンキ大学と契約してやる」と(笑)。それは3年前ですが、だんだんそういう時代が来るんだろうな、と思います。

最近では、ときどき学長が来るんですけれども、産業経営学科の教員が全員集まって意見交換をするわけです。目立った地域貢献事業をやっているのは誰と誰か、こうくるわけです。みんな下向いていて、田中さんたちの大学間交流協議会はやっているよなあと、何人ぐらいいるのかと聞かれて、そのときはたまたま3

人しかいなかった。その後で、入れてくれる？と。そんなもんじゃないですかね。

光本 きっかけはそれでも、入ってみて面白さに気がつければ、それはそれで。

田中 先にいったように、この事業は本当に厄介な、単純にはできない仕事なんですね。時間的にもものすごい時間をとられるし、膨大なエネルギーなんですね。学内の仕事をやりながら授業もやりながら、論文を書きながら、それでもやる。そうすると、かなりハードな状況になるわけです。それでもやっていくということがどうしても必要だという人がいままでやってきたんです。そういったことが評価されることになれば、僕らは日本の大学も普通になってきつつあるのかなと思うんです。

姉崎 大学改革の項目に地域貢献を入れるというふうに。

田中 大学の視点も変わってきたんじゃないんですかね。大学とは何ぞや、学生がいての大学、学生主体というんですかね、学生を中心にした大学に戻ろうと。理念的なものを生み出して、その大学はある地域にどう対応していくのか。大学本来のあり方ということに向かっているんじゃないか。ソクラテスまで出さなくてもいいんですけれどもね。そういう意味では、本来の大学の姿に戻りつつある。そういう意味で、我々がやっていることは、いままでのようにマイナスじゃなくて、すぐにプラスにはならないにしても、まあせいぜいプラスマイナスゼロぐらいで勘弁してもらいたいなと思っています。

ただ、評価をされたいとか、これを業績の基準にして昇格昇進という人はほとんどいないですよ。面白い、地域でやるのは自分にフィードバックしてくることがものすごく面白いという人が多いんですね。だからなかなか全員参加というのは、難しいかもしれないですね。決して我々がボランティアでやっているとか、何か犠牲的精神でやっているとかいうことは一切ありません。面白いからやっているというそれだけの話です。

世田谷との関係

石山 農大の本体の方では、そういう活動というのは？

田中 世田谷の方では、大学が近隣にあるんですね。駒澤大学とか、日本体育大とか、昭和女子大とか、六つぐらいあるんですよ。世田谷6大学連携というのをいまやっていますね。それは学長が主導してやってい

るんです。ものすごく高いお金も人も全部投入して、オホーツクでやっているんだから、こっちゃだってやろうと。こっちは昔何もしてくれなかったわけですよ。まあそれは別にどうでもいいんですけども（笑）。

肩入れされると、お金も出すけれど口も出すという話になって厄介ですので、いらないんですけどもね。

姉崎 経営的には必ずしも良好な環境ではないところに立地して、しかしなおかつやられている。それは本部のこともあるのかなという気もするんですが、先生の見られている範囲では。

田中 経営という観点からですか？

姉崎 ええ。

田中 正直いって、三つ学科があるんですけども、うちの学科がいちばん学生集めるには苦勞しています。ただ、経常経費から見ていくと、決して赤ではないんですよ。つくったときの積立金というのがあって、それを学生納付金から、他の学科はある程度返済しているんですけども、うちの学科は返済できない状況です。返済しないでどんどん投資しているんですね。そういう意味では、もう少し学生数、定員を増やして余裕を持った方が、研究とか運営の自由度が高まっていくんじゃないかと思います。だから、定員を増やすという方向で、決定かどうか分かりませんが、考えているところなんです。経営的には、赤ではないが黒でもない。教育機関としては一番理想的です。教育機関で黒が出たらどういうところなんだ？と思っているんですけども。

光本 受験者数が減ったとかそういうことではないんですね。

田中 受験者数は増えるということはないですけども、それぞれの学科で努力はしています。指定校制を導入してみたり。僕が入試の関係の対策委員長をやったのが5年前です。いままでなかったんですけど、うちの学科だけ5年前から始めた。指定校を導入して、そのための予算を法人に要請して、日本全国に300くらい指定校をつくっています。かなり確実に上がってきていますというのが現実ですね。

これからどうなっていくのか。2007年度とか2009年度くらいに、そういう状況にはどうなのか分かりませんが、いまの状況では、一般入試とか、指定校推薦入試とか、体育会系の推薦とか、様々な推薦制度をトータルすると、大半が集まります。一般入試は2回あるんですけども、1期・2期でやるんですけど、2期目の方でもものすごくレベルが高い。合格点ものすごく高い。合格点でもものすごく高いですけ

れども取れない。これをどうしようか、いまそっちの方の問題があります。

校友のネットワーク

光本 東農大には強力な校友の存在がありますね。この地域の校友会の網走地区が特に大学の設立に協力するということで機関を立ち上げたり、寄付を積極的に募るといえることがあるとうかがっているんですけども、オホーツクの協議会にも地域の交流のネットワークみたいなものの存在が、何らかの有形無形の協力とか、ありますか。

田中 ありますよ。

光本 例えばどういうことが。

田中 いまはもう退職されているんですけども、たまたまうちの大学の卒業生が支庁長になったものですから、菊池さんという方なんですけれども、最後は、本庁の土木部長でした。いまは校友会の北海道支部長をやっているんです。その方が道の補助金を次の支庁長に引き継ぎをしてくれているわけです。それから、農協の人にも、網走市役所にも次長をやっていた方が校友会の人でした。それでサポートしてくれるというような体制がありました。

僕は農大の出身ではないんですけども、びっくりするのは、校友会というのは家族的に支援するんですね。普通、僕なんかの大学では同窓会というのはあまりない。何もないんですけどね。だから、入学関係の説明会とか、教育懇談会とか、校友が中心となって組織し集めるんですね。それで記念品とか。

上田 北海道に大勢いらっしゃるんですか？

田中 北海道支部の校友メンバーは、把握しているのは2300人。本当はその倍くらいいるんじゃないかというんですけどね。だから4000人。よその大学だったら4000人いたとしても100人集まるか集まらないかでしょね。2300名の名簿ができて校友会支部総会なんかに集まるんですね。全員は集まらないでしょうけれど。そういうのがやっぱりすごい。外国にもあります、台湾に支部があったりとかアメリカに支部があったり。

姉崎 国際交流がたくさんできそうですね。

現場に根ざした経営学教育

姉崎 経営的にはこのある種、健全なことをやって、学生数も確保できている。それから本部からも支えがきちんとある。

田中 そうです。経営学というのは都市型の科目なん

です。だからこういう地域では集まりっこないんです。ですけど、この地域でしかできない経営教育を考えているんです。どういうことがというと、経営学を勉強するときに、東京の大学の経営学は本ですよ、ほとんど概論とか、概説とかを読んで勉強する。イメージやリアリティがないんです。経営のリアリティというのが全くないんです。経営分析といったら当然、会計とか簿記が必要になってくるんです。何のためにこれやっているのか分からないで単位は取る、卒業しなきゃいけない。

こっちへ来れば、せっかく中小零細の企業が多いので、そういったところで企業調査をします。企業調査という科目を設けまして実習です。もちろんわれわれがコーディネートするんですけれども、各企業に経営分析やらせてくださいといったら、そこまで資料を出していいの？というような会計資料を出してくるんですよ。大いに使ってくれといった。かなりリアリティのある経営分析をして、逆に感謝されていんですね。学生が「おじさんね」とかいった、社長におじさんはないだろうって(笑)。「おじさん、これ人件費異常に高いわ」とかいった、「そうか、どんぶり勘定だったな」とかいった、もしくは、資材はどこから仕入れているか知らないけれど、「原材料費仕入値が高過ぎますよ」とかいった、生産との整合性がないとか分かってくるわけです。現場でやってくるから非常によく分かってくるんです。それまでは本を読んでもチンプンカンプンで、簿記さえ貸し方借り方やらなきゃいけないのって、わあわあいていたのが、現場に行き出すと非常によく分かる。だから簿記もやる。

ある意味では、我々の時代、もしくは東京なんかでやっているようなのは積み上げの勉強だったんだなあと分かりましたね。ここに来たら、泳ぎ方が分からなかったらとりあえず投げ込む。水を飲みながら、死にたくないから泳ぎ方を勉強するというような、例えばが悪いですけども、経営とか、地域の会社も、現場に行くと地域問題もよくあるし、商業の問題もよく分かるし、それがありがたいなと思うんです。

要するに、具体から一般へ、一般から普遍へ、そして、いわゆる企業経営を身につけていく。いままで空疎だった理論だけだったものがかなりリアリティがあって、教育を積み上げて行けるんじゃないかなと思うんです。それを売り出したんですね。学生募集とか案内にははっきりそれは書きます。東京ではできません、ここに来なきゃできませんよと。立派な先生がいても、東京だったらできない。ここだからできるんだ

と。東京の企業はそこまで資料を渡しません。いいですよといわれても見学くらいですね。企業見学、そんなものを見ても意味がないです。そういう意味で、ここでしかできない授業というのものもあるんじゃないかと思います。

地域が学生を育てる

光本 地域の方が学生を見る目が温かいということですか。

田中 温かいですね。はっきりいって、親みたいなの。卒業生の大半が就職をして、何年かして、せっかく有給休暇をもらっているのに、沖縄とかハワイに行けばいいのに、わざわざ網走に戻ってきます。最初、こんな田舎とか、こんなところ1日も嫌だ、といていたやつがだんだん面倒を見てもらううちに、おじさん、お婆さんといって。バイトも特殊なんですよ。農家バイトとか漁家バイトとかね。それで朝早かったりして家族みたいになっている。仕事が終わった後、朝飯を食って学校へ行く。ものすごい親身になってくれる。戻って来たときには、お婆さんに会いたいとかね。久しぶりにおじさんどうしているかなと思って見に来ましたとか。第二の故郷であり、第二の親のような、そういうふうになるまで面倒見てくれるというのもあるんでしょうね。温かいですね。

そういった意味で、地域の人たちには本当に感謝しています。そういったものもあるからなおさら我々はこれをやらなければいけないし、大学を挙げてこれからやっていかなければならないと、学長と先日話したばかりなんです。

姉崎 出身地からいうと全国から来るんですか？

田中 全校の8割が道外です。道内が2割です。

姉崎 けっこう地方の出身？

田中 8割のうちの7割が関東近県です。ほとんどが東京・千葉・埼玉・神奈川ですね。ほとんど関東近県の都市から来た連中が多いですね。もちろん、カルチャーショックは大きいですよ。だから、「ここはいいじゃないか、景色はいいし、環境はいいし」とかいったって、「先生は大学どこ行ったんですか？」、「いや、東京」、「若いときは先生ずっと都会で楽しんだんでしょ。歳にとって環境がこっちでいいねとかいわないでくださいよ」とかいわれて(笑)、怒られるんです。

光本 学生もやりますね。

田中 若者は、都会がいいんだとか、でもそういうやつがだんだんハマって、釣りに行ったり、温泉周りしたり、鯨の解体のアルバイトをやったり。ここは捕鯨

をやっている会社が2件あって、1件は僕と親しいものですから、学生のバイト、バイトだけじゃない、そういった文化を伝えたいというのです。変わり者の社長が、使っていいですか？というので、いいですよといって何人か紹介したら、夜中2時頃行って、いま鯨があがるぞ、ワーンと学生たちが行くわけです。学生たちは危ないから大蛇はやりませんけれど、両側から引っぱったりして切り分けて、箱に入れて、朝6時ぐらいまで。それで1万6000円ぐらいもらって、なおかつクジラを持っていけといって、それぞれもらうわけです。半分は自分のために冷蔵庫に入れて、半分はおふくろさんに送るとかで。そうしたら、あんたを網走にやってよかった(笑)、というわけですね。網走にいたら本当にそういうのありますよ。

上田 学生さんは網走の市街にお住まいですか。

田中 ほとんど市内です。密接ですね。札幌あたりだったら、僕もこんなに苦労しないと思うんですよ。どこに行っても会うしね。大学だけでもういいかげんうんざりなのに、向こうもそうでしょうけれど、あっちでもこっちでも学生としょっちゅう会うし、帰りに疲れてみんなで飲みに行こうぜっていったら、飲み屋で、先生また飲みに来たのって、何にする？って(笑)。スーパーマーケットに行っても、またこんなカップ麺ばっかり食べてとか、いいから早く入れろっていったって、レジにいるもんだから、どうにもならないんですよ。夏目漱石の坊ちゃんの世界ですね。あの先生は、団子三皿食っていたとか。翌日全部広まっているわけです。まあ家庭的といえ家庭적입니다けれどね。

地域が、ある意味では大学をオープンにさせている。この大学の建物、組織だけじゃなくて、地域全体が教育機関だと僕は捉えていますけれども、せっかく地域が教育機関なのだから、利用しない手はないということで、強制じゃなく、関心のある人で。

佐藤 最初、田舎で嫌だといっていた学生が、バイトとかしだして地域の人とかかわるのは。

田中 いろいろあると思うんですよ。一つじゃないと思うんだけど、基本的には人間は人間にしか育てられないし、影響を受けないと思いますよ。

佐藤 バイトだけではなくて、大学の授業でも、さっきおっしゃっていたような企業調査、そういう機会がたくさんあるんですか。

田中 ありますね。だから実習が多いですよ。極端に言えば体験型の授業をやっているということでしょうね。

これは最近増えてきていますけれども、うちの大学



でも二つほど株式会社があります。農大バイオインダストリー株式会社、エミューの肉とか卵とか売る会社で、社長は学生です。学生たちの社長と専務で、もちろん教員も役員に入っていますけれども、役員としてかわる教員はお金を出したんですよ。僕はうまい具合に免れたんですけど、倒産したときに困るから(笑)。そういうのでも、東京にいたら社長になった学生も専務になった学生も経験できないでしょうね。学生のとときに普通に考えて社長になんかなれないです。そこらへんは失敗してもいいんですよ、経験になるから。光本 今日はこの調査の最終日として、今日中に札幌に帰ってしまうんですけども、最後を飾るようなお話をいただいて、本当によかったと思います。

姉崎 どうも長い間ありがとうございました。